WASON
HQ
1.04
J77+
Dec. 1
1888
n. 138

The Woman's Magazine.

女學雜誌

一冊五錢

當府内無郵税

版權所有

各土曜日出版

明治廿一年 (第百參拾八號) 十二月一日發

社説
將來の日本人民(第二)小兒は大人の父なり
論説
米國の女子(其三)(元良勇次郎)○女學生論(星野光多)
批評
こども○三の婦人雜誌評定○髮切の説明○眞美人を許す
叢話
婦人の德は餘韻に在り○既に晩し○固く怒るべし○女の股引○母親の威光○女子看護法の心得(津田梅子)○婦人衛生一斑(櫻井郁次郎)○女學古文(德川家康)
小説
哲女の卷
佳人傳
正傳尼、妙海尼
寄書
新報
外報
小供談

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

版權所有　一册五錢

各土曜日出版　當府内無郵税

明治廿一年（第百參拾八號）十二月一日發

社説

將來の日本人民（第二）小兒は大人の父なり

論説

米國の女子（其三）（元良勇次郎）○女學生論（星野光多）

批評

こども○三の婦人雜誌評定○髮切の說明○眞美人を許す

叢話

婦人の德は餘閒に在り○既に晩し○固く怒るべし○女の股引○母親の威光○女子看護法の心得（津田梅子）○婦人衞生一斑（櫻井郁次郎）○女學古文（德川家康）

小説

哲女の卷

佳傳

正傳尼、妙海尼

寄書

新報

外報

小供談

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 138. DECEMBER 1ST, 1888.

EDITORIAL:— The Future Japanese Nation (The Child is Father of the Man).

LEADING ARTICLES:—Women of America, by Mr. Motora. PH. D. On Girl-students, by Mr. K. Hoshino.

CRITICAL NOTES:—"The Children" "The Three Woman's Magazines Criticized." "The Explanation of Kamikiri." "Criticism on the True Beauty."

MISCELLANIES:— "Woman's Silent Influence." "It is Already Late." "Be firm in your Anger." "Hints about Nursing(Miss M. Tsuda)." "Drawers for Ladies." "The Mother's Dignity." "Hygiene for Woman." "Woman's Classics."

NOVELS:— Tetsujo no Maki.

BIOGRAPHIES.

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

通信女學の廣告

通信女學 第拾五巻 發兌

蓋し最良の教科書

婦人會員の合讀に 内の獨學に適せり又月

去月廿九日出版せり

一冊紙數七十頁 定價廿錢全國無郵税

●珊瑚の珠（第八十八回）

たつた川のほとりにてよめる　　坂上是則

もみちゝのおかれさりせは立田川みづのあきをゝたれかしらまし

仁和寺に菊の花めしけるときに歌そへてたてまつれとおほせられけれはよみてたてまつりける　　平貞文

秋を置てときこそありけれ菊の花うつろふからに色の増れゝ

仙宮ゝ菊をわけて人のいたれるかたをよめる　　素性法師

ぬれてほす山路のきくの露のまにいつかちとせをわれゝ經にけん

秋のうたとてよめる　　在原元方

雨ふれと露もゝらしをかさとりの山はいかてかもみち染けん

北山にもみちをらんとてまかれりけるときによめる　　紀貫之

見る人もなくて散ぬるおく山のもみちゝよるの錦なりけり

題しらす　　よみ人しらす

このまよりもりくる月のかけ見れは心つくしの秋はきにけり

女學雜誌　第百三十八號　明治二十一年十二月一日發兌

社説

○將來の日本人民

二。小兒は大人の父なり。

昔し、アテンスの政事家セミストクリース、一日饗宴に列したるに、席上酔歌踏舞するもの殆んど狂するに似たり、而して彼れは蓋し一隅の窓下に椅りて大欠伸したるならん、則はち主人琵琶を寄せて之を研らんことを望む、彼れ傲然として曰く、小生琵琶を研ることを存ぜず、然れども小國を大國と爲すの術は覺悟致し居れりと。思ふに此の氣象は亦た一國民が大きくなり強くなるに大切なるものなり、酔歌踏舞もとより國を立るに効ある可らず、主として要むべきは即はち國民が元氣智徳にあるなり、之を以て哲儒ベーコンは言へり、城廓千里、武庫富充、馬は肥え、軍車具はり、銃器彈藥欠くる所ろなしと雖へども、若し國民强からずんば、恰かも是れ羊にして狼の衣を着くるもの也と、實に然り、故に將來の日本人民に就て之を思はゞ、鐵道電信の便如何に備はると雖ども安心しがたし、海陸守攻の戰備何如に立派なりと雖ども安心しがたし、教育何如に行はれ、國會何如に開くると云へども亦安心しがたし、此の人民先づ謹嚴勉强の質に移り、各箇其の責任を認めて忠實に働らき、智力の高きが上に更らに道德上の總べての美質を圓滿するに至らずんば、吾人は決して安心することを得ざるべしと信ずる也。之を以て、將來の日本人民を何如んせんと云はゞ、吾人は猶豫なく直答す、乞ふ先づ其の氣風の輕々しきを改めしめよと、言を換へて言はゞ、乞ふ先づ其の道德をして改まらしめよと。

國民の氣風を改め、大いに其の道德を高むることに付ては、論者或は其の盡力の實に効能渺きことを説くものあり、然れども吾人は決して如此く信ずる能はず、固より時として其盡力の實に効能多からざることあり、然れども其効能多からざるを見るが故に、則はち反つて之に盡力することの益々切要なることを信ずるなり。何んとなれば、世は必らず進まざる可らず、而して弱より强よ、不善より善徳に進まざる可らず、而らして吾等は實に如此く世をして進ましめざる可らざる也、故に假りに若し一國の惡風を改めて之を善徳に導くことを極めて至難なりとするも、既に至難ならば則はち之が爲めに盡力すること、更らに一日も早く一日も多く一日も固く勉めざる可らざるを

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

覺るが故也。尋常平時の世態を見るも尚ほ且つ此の覺悟あらざる可らざるに、况んや亡國の徴目前に迫まり、父母の鄕忽焉として將に坤輿の表面より沒し去らんとするを見るに於ては、苟くも志あるものにして何人か之を忽諸にするを得べきや。之を以て吾人は、彼の老莊を學んで常に無爲大觀するの學士諸君に對しては、特に先づ其の注意を仰ぎ置かざる可らず。

然らば則ち、何如にして國民の氣風を改め、之を善德に導びくことを得べき乎。大學に謂く、堯舜天下を帥うるに仁を以てして而して民之に從がふ、桀紂天下を帥うるに暴を以てして而して民之に從がふ、……故に國を治るは先づ身を脩るに在り、……詩に云ふ宜レ兄宜レ弟と苟くも兄に宜しく弟に宜しくば則はち以て國人に敎ゆべき也と、蓋し仁者ありて若し世に立たば、其德風の如く行われて万民を化すべし、譬へば北辰其の所に居つて衆星の之に共ふが如く、國風國俗乍まちにして之に率がうと云ふ也」。此の複雜したる活世界の衆庶民は、果して能く如此く無雜作に感化せらるべきか、之れ大ひに掛念すべきもの也。然れども近年我國に於て起りたる變遷を見て密かに之を思ふに、少なくとも如此き感化は多少此の日本に行わるゝの甚だ容易なることを見るなり。即はち上に於て舞踏起れば下忽まちにして踊るなり、上にして洋服流行すれば下忽まちにして洋裝する也、一人もし小說を作れば千人忽まちにして小說家となる也、一人もし騷ぎ廻れば萬人乍まちにして政事家となる也、今の日本人は恰かも小供の如し、能く人に眞似し、人の善惡是非に拘わらず能く之に眞似し、而も尤も多く其上に立てるの人に眞似する也、此の氣骨元來第一に好ましからず、吾人は亦た此者其自身をも改めんことを切望するものなりと雖ども、然れども先づ日本人を導きて之より善風に移らしめんとするに當り、今に於ては此の氣風の亦大ひに利用すべきことを思わざる可らず。故に孔敎の所謂る君子の德風の如くに行わるゝとは、之を今の支那人に就て言わば甚だ覺束なし、之を吾が日本人に就て言わば其の言の大ひに味わひあるを知る也」。然りと雖ども、抑も是れ孔子の一家言にあらず、亦た啻に我日本に於てのみ行わるべきの道理にあらず、苟くも君子義人世に立つて屹然燦然其の高德を發散するに於ては、其の感化の及ぶ所ろ日に日に廣ろく、一家より一鄕に及ぼし、一鄕より一縣に及ぼし、遂に一國を擧げて切に其の感化によりて化せらるゝの運必らずやこれあり、

吾人之を確信す、たゞ其時日の左樣に急激なるとを得まじとのみ思ふと也。

故に今の國風を宜しきに改めんと欲せば、上に在るもの及び率先するもの先づ尤も深く愼しまざる可らず、彼等は須らく節儉苦勉すべし、須らく剛毅强大なるべし、須らく謹嚴自重なるべし、文學に從事するものは須らく淸潔高尙の筆を揮ふべし、敎育に從事するものは須らく篤行正肅の敎を與ふべし、布敎に從事するものは、須らく守道正剛にしてよく其の自任自重に謙遜勇猛の德を兼ぬるとを示すべし、如此ならば五年にして少さか改まり、十年にして大いに改まり、今の輕薄なる日本の國風は、遠からずして少さか安心するを得るの地に達すべき也。

然りと雖ども、吾人は之を以て十分なる改良法なりと認たむる能はず、又た其の改良も十分の確かなる感化を施こし得たりとは信ずる能はず、故に吾人はよし假令ひ十年の後ち國風大いに改り得たりと想像するも、然れども、則ち之れ丈けにて大いに安心するとを得ざるもの也。」蓋し國民は生ける一個の大なる人間の如し、吾人が之を見る恰かも人間の稍や大なるものゝ如しとして可なり、故に一人すでに長じて中學に入り、大學に入り、其の間だに受けたる所ろの敎育及び感化によりて、行狀固より大いに改まり得るが如く、一國民のすでに稍や長じたるものも、當時他より改められて以て大に改まり了するとあるや勿論なり。然れども、中學大學時代の敎育は決して人を全く改むると能はず、たゞ其の稟質の幾分を矯正するに過ぎざるを知らば、國民を既に其の長じたるの後に於て感化するの効能は亦た思ひの外に薄からざるを得ざる也。蓋し人を改むるの尤も多きものは宗敎に若くなく、宗敎の尤も多く人を改むるは熱信なる傳敎師に若くなし、而して熱信なる傳敎師中彼のマーアンルーテルの如きは古來殆んど比類なきもの也、然れども彼は言へり、「老ひたる犬を從順にするは難し、老ひたる惡者を敬虔にするは難し、然れども彼の若き草木は更らに容易に矯むるとを得る也」と、之れ年長者の改めがたく、年少者の敎へ易きを言ふなり、思ふに既に長じたるものに對しては之を改むる也、未だ長ぜざるものに對しては之れを形造る也、一は之を曲ぐるなり一は之を伸ばす也、故に惣ての感化は之を其の初めに於てすれば勞一に過ぎずして効百に倍す、之を以て米國第一の敎育家ホレースマンは言へり、「僧侶傳敎師は實に改革者なり、余謹んでこれを容

す、然れども凡そ不斷生長するものに就て云ときは、一人の正しき形造り手は、千の熱心なる改め手に優るべし」と、皆是其の初めの愼しむべきを云ふ也。之を以て、今の日本國風の宜しからざるを改めんとするに當つては、吾人は先づ其の既に長じたる日本人民を改むるの策も亦た大切なりと信ずると雖ども、然れども更らに遠大に更らに大効能的に考ふるときは、則はち將來の日本人民を斯々の如く形造らざる可らずと信ずる所ろのもの丶、更らに甚はだ大切なるとを覺ゆるなり。蓋し小兒は大人の父なり、天に達する槲樹の一代は其の種子に含まると知らば、全世界を動かしたる大豪傑の一生は其の襁褓の中に包まれたりと知らば、小兒の育て方こそ尤も用心すべきものなれ。詩仙ミルトン吟じて曰く、彼の朝たの一日を卜する如く、幼稚は即はち後代の大人を現はすと。老度ブルーハムは精密なる觀察の后に於て曰く、小兒が生てより一年半乃至二年半に至る迄の間に、世上の万物を知り、已が力並に他の物躰の性を知り、更らに已れの心及び他人の心を知ると、其の殘る一世に於て學び知るよりも多しと。彼の立志篇品行論等を著はし、人の性情を知悉するに於て著名なるスマイルスは、之に續ひて曰く、ブルーハムが所云る此の初代なる者に於て小兒が學び得る所ろの智識の尤も價ひあるや、后年ケムブリッヂ、又はヲックスフホルドの大學校に於て最上級を占め得たるの智識よりも尊とし、故に若し假りに初代に於ての彼の智識を失ひたりとすれば、后代に於ての此の智識を得たるとも、譬へば生命を一週間維持延長する丈けの價値をも有せずと。小兒の敎育は夫れ如此くに大人の敎育よりも効能多きなり、故に亦た將來の日本人民を宜しきに形造るは、今の日本人民を假初に改むるの効能に優るや明らけし、固より其一を廢す可らずと雖ども、然れども重きは其の初めなるもの其の未來なるものに置かざる可らず、況んや是れ近來政海の熱大ひに昇り、尋常士人の惣てが殆んど眼前の改良に狂奔せんとするの日いよ／＼近づきたるに於てをや、今に於ては吾黨尤も着實に尤も遠大に計畫する所なかる可らず。而して此の着實なる遠大なる大改良の根底を組立るものは、實に多く女性諸君の任となれり、即はち吾人が先に言へる如く、女性中幾多の義人には其の負へる所の責任今日いよ／＼重くなりしなり。諸君が長所は即はち靜かに働らくに在り、隱て現はれざるにあり、小兒を撫育して遠大の希望を確立するにあり、今の日本人民を見て、而して今の日本の時勢に立

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

てり、諸君が尤も多く盡力せらるべきの時は即ち今日にあらずや、故に諸君請ふ深く如此く覺悟せよ、而して后ち其の頭を回らし、彼の幼稚園は何如ん、彼の家庭教育は何如ん、そもそも小兒教育と云へる全躰に於ける女性今日の智識は何如んと自問せらるべき也。

論説

○米國の女子（其三）

哲學博士 元良勇次郎演
佃與次郎筆記

然して、今日我々が亞米利加の有樣を見ると云ふものは、丁度我々が實驗の學術を學びつゝ行く樣なもので、亞米利加は我々の爲めに實驗して此の例に倣へば、斯う云ふ風になる、ア、云ふ風が果して宜しいか、宜しくないか、之を誤れば斯う云ふ結果がある、これは良いか否いか吾々の先導者となりて試驗して居るものは即ち亞米利加であります。我々が今考へる所によれば二ツの大切と思ふ事が有る、之を述べて今日の御話を終らうと思ふ。我々が世界に居る間は、固より此の世界の風俗に從はなければならぬ、此の世界は固より不完全のものです、不完全の世界に、完全の風俗を行なをうと云ふても、迚も往かん、不完全なれば其の不完全に當てはまるだけの事を行はなければならぬ、道德々々と云ふても天國に往きし樣な心持では此の世界には行はれません、此の世界に居て道德を行はんには、之に從て改良もしなければならん、而して今日の社會は道理の世の中、即ち物理の力が支配して居る世の中で、知惠の支配する處はまだ僅かです、道德の支配する處は又極めて僅かです、固より我々が爲さんとする所は道德の力を殖やさんとするの目的であるが、併し之を爲すには此の世の風俗に從はなければならぬ。此の運動しつゝある社會に立ちて婦人が男子と同じき權利を持たうと思ふには富を得るを第一にしなければならぬと思ふ、固より富とは金を貯へて榮耀榮華をしやうと云ふのでは無い、只婦人が自分の活計上に於て獨立の出きる丈けの力量を現さなければならぬ、換言すれば、男子に依らずして、生活の出きる樣にしなければならぬ、併し、私は何うしても自立して活計を立てよと云ふのではない、縱令ソレ丈けの金を儲けずともソレ丈けの物は具へて置かなければならぬ、否らざれば、私は斷言します、婦人は迚も男子と同等の權を行して肩を並ぶるとは出きぬと、亞米利加婦人は既に財產所有の權があるので、左れば日本婦人も此の所有の權を持つか、左なくば活計を立るだけ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の力量を自分に備ふるか、此の二の中の一を以て肉躰の獨立を務むるとは、一番に大切で且つ最初にしなければならぬと思ひます。

第二は此所で私の申すべきとか申すべからざる事かは知らぬが、併し此の所は公けに演舌する譯でもなく生徒諸君丈に申すので御座いますが、亞米利加の婦人が男子を支配するにモ一ッ最も大切なる原因がある、則ち西洋語で言へば、チャームと云ふて自分の標致を以て男子の心を支配するのです、標致と云へば大層廣き言葉だが、能く考へれば餘程面白き意味が有る、固より肉躰の標致も、其中には在るのだが米國は婦人の愛らしきが第一だと申しますが、追々歐羅巴人にも聞きますと矢張ソレは事實だと云ふ樣に申して居ります、シテ此肉躰の標致を以て男子を支配するは餘程大なる事で御座いませう、肉躰の標致と云ふてからが、只肌質の密かい、色の白き顔の美くしきばかりではなくして、其人の智識によりて標致を變ずる事が出きる、例へば今嬋姸たる美貌の婦人がある、併し、其人は智恵が鈍い、又一方には標致は左までゝもないが才は心に滿ちて居る、左すれば、其人は智恵を以て自分の標致を變ずる事が出きる、其れはエキスプレッションと申して、眼鼻口動き方物の言ひ方や總て外に現はるゝ行狀、日本の禮儀なども其中に這入るとで、歩行き方まで、總て肉躰に就て運動のしかた、是れは畢竟肉體其物に附て居るのではない内から出るのですから、智恵を以て其の標致を作る事が出きるのです、然して亞米利加の婦人はエキスプレッションも好いと云ふ、亦た身の飾り方をも知て居るので、粗末にも過ぎず、飾りにも過ぎず、人に對しての挨拶までがエキスプレッションに富んで居る。其の次には道德であるが、道德に於ては、私は日本婦人は亞米利加婦人に比して優るとも劣る所は無いと信じますから、是れは別段に述べませんが、益々此の道德を修養するが上に、第一に富と云ふものを增して、良人に依らずとも、一身の處置に苦しまぬ樣にしたならば、以て女權を高むる事も出き、男子の侮を防ぐとも出き樣と思ふ、果して此の目的を以て猛進したならば、或は亞米利加をも凌駕すべき、一美風俗の新天地を、我日本に起すとも、敢て六ケ敷ともあるまいと思ひます。(完)

靜寂獨居の境に入らんとせば先ブ社會より隱るゝが如く亦た其書齋よりも隱れざる可らず齋中固より人なしと雖ども余すでに讀み既に書せば余は獨居するにあらず

(エメルソン)

○女學生論（廿四）

星野光多演

此の如く、考へたならば、あなた方は果して如何なる感觸を起されますか、女生としては、先づ學んだ物を役に立たせなければならん、論語讀みの論語知らずでは困る、是非とも役に立たせてもらいたい、或は人に嫁して妻となるにも、或は親となるにも、或は事業をするにも、學問をするにも何でもそれには健康と云へるものが必要である、故に此のからだを達者にすると云ふとは實は餘所事では御座いませんぞ、ソコデ養生と云ふものが大切でありますが養生したいと思ふても充分の金も無い、毎日西洋料理でも食べて、毎日上野か向島にでも遊んで居らば宜しいで御座いませうが、然うは往かん。兎てもその事は理窟通りに行ふとは出きぬから、攝生を致すとは難いと考る者もある、如何にも六ケ敷きとは六ケ敷から出き兼るとは姑く措て出きる事柄を一ッ考へ詰めて見なければならんと思ふ。

前にも申す通り、箇樣に健康は大切であり、是非健康でなければならんのだが、然らば、私共が健康を得るには如何にするかと云ふに、今日お互の地位に於て、得らるゝ塲合に於て、健康を得なければならん、迚も願ッても出きぬ事抔を得やうとしても、ソレは無理である、今日我々の姿を以て得らるゝだけハ、健康を得やうとしないのハ間違である、病氣となれバ、最早醫者が有るから其事ハ申しませんが、平生に於て我等が持ち居るべき心得が三ッある、そは第一に食する事、第二動く事、第三寢る事です、此の三ッを度に過ぎれば無性者怠惰者となるのであるが、之を適當にするときは、健康に活潑にして有爲の人物となる事が出來ます。

第一食する事、何うも毎日結構のスープや牛乳や肉類などを飲食する譯にも參りますまいから、先づ今の處でハ一味か二味詰らぬ物と見て宜しい、併し、其の詰らん物の中に在るだけの滋養分を逃してハならん、外の物ハ無いでも宜しい、其有るだけの物の中よりある丈けの滋養部分をにがさぬ樣に致すが肝腎である、例へば、爰に疎末の食物がある、少しく這樣の堅き食物であると假定むれば、今私が之を食べる時に茶漬に致してサラ〳〵と呑込んで仕舞ふか、又は之に反して、丁寧によく〳〵嚙み碎きて食べますとすれば、其の結果ハ果して如何でありませう、同じ食物であるに、只鵜呑にしたのと嚙碎きたるのとハ、私のからだに特別の結果を現すであらうと思ふ、ソレ故に私共は食物の中に在る所の滋養分を逃して

いならん、食物を食べる時は程をはかるとか、嚙碎くとか、我身に益を與ふる樣に注意しなければならん。グラッドストンと云ふ人は食物を食べるとに餘程念を入れて齒が三十二枚あるから少なくも一枚で一嚙みの割合、三十二度嚙まないでは呑込まぬと云ふ話しを聞て居ります、獨逸の先きの老帝も小供の時より母の仕つけに因りて食物は能く嚙み碎いたと云ふ、此等は小さきとてはある、併し小さきうちにも大凡我々のからだに有益なる事があるのです、ソレ故に食物に就ては私共の出きるだけの所に於て爲めになる樣に注意致すとは我々の健康を助くるに於て大切なる一箇條であらうと思ふ。

次には動く事、食物ばかり能く食べても、運動が足りない時はモタレルから健康を害します、古き女の行儀に付ての書を見れば、女が戶外に出る時は、道の側らを徐々と步し、下を向て鼠の如くに、チヨロ〳〵と步行けと云ふが、私は大膽にも之に反對する覺悟です、寧ろ皆樣は虎の如くに步むべしと申します、人は兎や角評判をしても矢張眞直に背を伸ばして靑空を仰ぎて、威張て步く方が餘程運動にも宜しい事と思ひます。或は曰ふ、運動するの時間が無いと、私は決して此の口實を許しません、女學生にせよ、妻君にせよ、決して運動時間がないとは言はせない、運動の時間と、明かには定めずとも、心掛けて居れば、一擧一動皆な運動である、左れば、若し其覺悟さいあるなれば、必ず適度に身躰を運動する事が出來ます、幸に花園の如き者が、自分の家にあるとか、或は近隣にあると致しますときは、時々其の花園に入りて、所謂浩然の氣を養ひなば必ず其人に利益があります、又能く食物の消化を助けます。

次には眠る事です、昔しの女の禮法を見ますると、朝は一番に早く起きて、夜も一番に遲く眠ると云ふ、併し、之では日中針仕事をしながら、居眠りをすると云ふ結果が來ます、今日は之では成りません、モウ寢る鐘が鳴れば、本をバッタリ伏せ、寢床の中に躰を伸ばして、愉快に眠らなければならん、眠るは實に天の賜です、私共小供の時分には、眠る事が無ければ嘸宜しいだらうと思ひ、寢るのは厭なものでありましたが、今日になりて見ると、ドウシテドウシテ眠るとは誠に大切です、明日は旨い演舌をしなければならんとか、好き文章でも書かなければならんと云ふ時は、眠るとを務めまする、十分に眠れて、躰が休まる時は翌日の仕事が存分に意外に爲し得られます、試に人の家の容子を視るに、家庭の敎育の能く

行届く家にありては、母親は小兒を寢せつけるに骨折ます、其子供のムッかつて來る摸樣を見れば、窓の覆被を下して日光を遮り靜にして小供の枕邊に行き、息氣の音を殺してスヤスヤと眠りつく迄小兒の面を諦視て居ます、扨夕刻にあれば天の四方に幕が懸る、ソコデ、天地はシンとする、其時私共天の子供等は、上帝の御守りの中に、一夜を安眠致します、旨く眠りて明日快く起上れば、愉快に一日の仕事するとが出きます、故に寢ると云ふ事を勉なければなりません。前に述べましたとを一口に申せば、適度に愉快に寢る、適度に愉快に運動する、適度に愉快に食ふ、之を能く平生に心がけたならば、今迄病氣のあつた人ならばいざ知らず、特別なる病氣の原因ある者は、取り除として、通常の人が此三ッの者を能く心がけて守ッたならば、必ず健康を全うする事が出き、幸福を全うする事が出きやうと思ふ、學生となりて勉強する事も出き、妻となりて眞人を助る事も出き、親となりて小供を保育する事も充分に出きやうと思ふ、是が即ち、躰育の說である。尙ほ智悪の事、及び道德の事に就ては、充分に御話し仕たいと思ふ事もあるが、餘り長くあると、却て御迷惑と思ひますから、是れで御免を蒙ります。(完)

批評

○こども　第一號、十一月十三日印刷。

府下本郷西片町十番地いろは家より、松山傳十郎氏の編輯を以て、「こども」と稱する新雜誌の第一號出版せらる、別段發行の主旨と云ふべきものも見へねど、既に其題號に由て知らるゝ如く、小供に讀ませ、學ばせて、之が眞友と爲すにあるならむ、一冊十頁定價一錢毎週一回の發行なり。

嚢に小供のはな誌と云へる雜誌起りたりしが、僅かに七八號にて廢刊となり、其后嗣で現はるゝものもなかりき、西洋には、子供の讀べき新聞紙、雜誌、書籍、小說、等一々備わりて大に益を爲すとなるが、我國には未だ其の必要を感ずるもの少なく、僅かに女學雜誌に於て小供談の一欄を設けて、其の大欠點をかすくに補ひたるほどありき、然るに今や此の雜誌現はれたり、編輯の躰未だ宜しからずと云へども、願はくは追々に成長して、但し常までも小供らしくあつて、能く其大任を盡さんとを願ふ、尤も女學雜誌の小供談の如く、母親に小供談の材料を與へんとするとは趣向を異にし、苟くも此の「こども」の如く實際に小供の眞友たらんとするものは、常に左の規則を心得ざる可らず、

讀まするよりは、見さするようにすべし。即はち文章にて教ゆるよりは、繪を以て教ゆべし。例へばワンパク物語の繪の如く、數箇の圖の引續きに由て、一條の話しを形造るべき事。

理窟を止めて實地を多くし、普通の話しを止めて格段の談しを重にすべき事。

文字を少し、假名を多くし、何れも字を大きくすべき事。

吾人は此類の雜誌を甚はだ切要とするが故に、敢て「こども」及び未來の子供雜誌の編者机下に一言す。

○三の婦人雜誌評定　貴女之友第四十一號、評

所々にて三の婦人雜誌を評判したるに付、貴女之友は此に據りて左の一表を作り、且つ數言を附したり、云く、

被評者＼批評者	日本之女學		學海之指針 期する處	學海之指針 氣取る處	讀賣新聞
女學雜誌	馬上長刀を提ぐる勇婦	心膽剛跡なる老母	鳩の如く神聖	白百合	御家中の奥樣
いらつめ	優麗婉灼なる多情の佳人	窈窕婣妍たる美人	蝶の如く美麗	櫻	深窓の處女
貴女之友	親切なる教師	周密懇到なる細君	蜂の如く甲斐〳〵し	胡桃	世話女房

今此表を按ずるに、女學雜誌は人の畏敬する處ろ、いらつめは人の寵愛する處ろ、貴女之友は人の信任する處なりと云へるもの〻如く、日本之女學の評や穩、學海の指針の評や奇、讀賣新聞の評や巧なり、若し此表の縱行が被評三雜誌の眞相を畫けりとならば、横行は都て批評三記者の本性を寫せるならんか。

女學雜誌は、勇婦とせられ、老母とせられ、御家中の奥樣とせられ、斯く毎々女性にのみ喩えらるゝを殘念に思ふものなり、殊に、彼の女流にお相手とならんとのみ心掛らるゝ兩雜誌と對比せらるゝに於ては、平生少しく不平なき能わず。女學雜誌は、只だ女性にのみ說くものに非ずして、併せて男性に訴ふるもの也。只だ淑女となり貴女とならんとするものにあらずして、實に女たらんとするもの也。只だお慰さみ的、實用的、適用的の雜誌たるにあらずして、實に女學を硏究せんとするもの也。換言するに、女學雜誌は、大自然界の優性美性女性を開發し、代言し、主張し、保護し、現行適用する所ろの一部に任ずるもの也。固より今ま如此く氣取るとは言はず、然れども期する所ろ實に此に在る也。

○近時の女學論

（一）髮切病の說明

去月二十日出版東京醫學會雜誌第二十二號醫學會記事の中に醫學博士佐々木政吉氏髮切病患者のデモンストラチヨン演說大意を載せたり。此事は既に本紙上に毎々掲載したる所ろにして、且つ此后同氏が更らに精密に演述ありたるとき、其筆記を請受けて本紙上に掲載するの榮を得べき筈なれども、今

又た改めて其の大意なるものを見るに云く、

患者某二十才の婦人本年六月二十一日窓戸を閉鎖せし一室内に就眠し翌朝四時頃警覺せしに束髮の止めの部より截斷しまり頭部には只短毛を殘すのみ依て全く剃髮し其後漸々發生するも尚ほ時々切るゝと云ふ余は八月初て之を診せり是れを見るに彼の「ファーブス」或は「ヘルペス、トンズランス」の如き皮膚病等は飛跡も檢認せず而て患者は歇私垤里症を有すると已に其疑似痛覺及知覺麻痺等あるを以て之を知れり依て所謂「ヒステリー」性の詐欺にあらざるかを疑ひ種々方法を設け其檢索を試みしに全く患者の詐欺に出てたる所爲にあらず然り而て諸般の髮切りと云ふとは已に昔時日本に在りしとは嘗て聞知する所なり即ち寛政の頃ろ婦人に髮切病なる者ありて上國の際等髮の全く切られ落ると屢々にして當時は以て鬼神の所爲なりとし一般婦女には「異國より悪魔の神か來るにぞうこ吹戻せ伊勢の神風」なる歌を紙に記し之を笄に結んて頭上に戴きしとありしも更に其効なかりしと云ふ此時の切れ口は粘りたりと云ふ後明和八年江戸に流行し幻術者の疑獄を受けたる者も多しと云ふ以之考ふるに如斯髮切りは嘗て已に有りしとは判然たり借て此患者に就て第一詐欺の心を抱て切る者なるか或は自然に切らるゝ者なるやを定むるに其毛髮の斷口は利器を用ゐたるが如し故に利器を容ふか若くは利器あるも髮を切る能はざるの裝置を爲し置かざる可からず依て厳重なるヒポクラテス氏繃帶を施こし且つ封印して數日の後ち之を檢するに髮は全く切れ其切斷の状態は極めて不熟練なる剃髮師の施こしたるが如く五分計りにして階段を成せり第二醫院に在るの間は髮は切れつゝ生長せしが一日歸宅せしに其夜忽ち毛根より斷切せり云々と述べられ其患者を會員の前へ連れ來たられ且つ二日前嚴重なる繃帶を施こしたりとて其席上に於て解帶せられしに頭頂部に最も多く切られ其切落したる毛髮は大抵五分計の長さにして繃帶に附着せり當時は眉毛も漸々切落すと又た嘗て第二醫院に入院せしときの寫眞數葉と毛髮の顯微鏡標本數點示されたり

何分にも不思議なる病ひなるのみか、之を本邦婦人にのみ在たるの症と思ふときは、更に面白き研究と云ふべし。

○眞美人を評す（其二）

不知庵主人

著者は李長吉の悪流と見ゑ古塔、城跡、狐、鬼等を好まるゝ樣なるが爰に不思議なるは著者極めて「東」の字を好めり三頁に「此窓から東の方を見ると」とあり十頁に「丁度東の山の上から」とあり三十九頁に「東の空には」とあり四十頁に「東の岸には」とあり六合の中誰の東のみを稱ばるゝは何の故ぞ景色は東に限るものかは外題が眞美人なればリーホンは主人公と思はるれど何故に眞美人なるや三頁にことごとしく形容されたが別に珍らしくもなし沈魚落雁閉花羞花はむかしの美人是はバイオリンを彈じて月花にさまよひタイバー河を下る（岸を離るゝ事何間あるや知らねど）船に飛込む勇あれば眞美人と申すなるか。

兎もあれ景色を寫すに意を注ぎリーホンはどうしてチープルに行きしやゴータアはドウして死にしやなぜチッシーは逗い羅馬へ來て商賣換をなせしや是等の點はボンヤリとして朧月夜の如くリオンの片田舎は忽ち子ープルの街となり一轉してローマの城壁を現じ恰も大目鏡を見る心地し彩中の人物悉くウロツキまはれば是をヒツコシ物語と名附べしと友人某は云ひしが余の考にては月夜物語となすこそ穩當ならん。

末筆ながら硯友社の紅葉殿にもの申さん、

余は五郎氏の寛政でも何でもなけれど氏に代りて御返辭申すべし余は元より蟻にあらざれば箱庭に杖を引きし事もなく箱庭の奇觀を見物せし事もなけれどまさかに半紙の古折に土を盛り苔を栽せ玩は旅人よりも高く幽谷の間に鉛の天神樣を安置したるのみを箱庭とは心得ずシカシどんなに工夫を凝すとも箱庭は箱庭なり邪魔お坊さんお嬢ッチャマのお慰にして雅人文客の樂むべきものにあらず傳馬町の見事なる五十三次評判なくして淺草の粗末なる富士山跡を稱せしは何故なるか紅葉の君は箱庭の奇觀を知り給へば是を以て上野向島の自然景と云ふべしと思ひ給ふような笑止々々かくは申すものゝ眞美人は玉階朱欄の下に据ゑ置きて金衣公子に愛玩せらるゝ箱庭なる事疑ふまでもなけれどマア話がそんなものかと存ずる又・・・・・溺山の事に就き御辯有し隨御道理と思はるれど多きも少なきも時にこそよれ紅葉大人が・・・・のお手並はさて置眞美人の著者はチト濫用せしが如し試に例を舉ぐれば四十七頁に「前に進・・・・た」及び四十八頁に「今だ・・・・今・・・・今・・・・うう打下して・・・・氣絶・・・・スルト林は崖の上へドサリ・・・・・・・」とあるの如き最も甚しと云ふべし硯友社員が・・・・好きの深き御樣子其内御說明に相成るとの事かく申す評者恐悦此上なく候。

是迄許せしものゝ眞美人は近頃無類の小說です余が特に賞讃すべき點を舉ぐれば宿の眞砂の數い盡されぬほどなればなりシカシ麻溪居士「清少の才もあり紫の文をかなりに綴り」とは慥に我の惑目ぞや西の讀に「我子を悔る鬼は大馬鹿」とありチトたしなみめされ。

誰か賢き女を見出すことを得ん、その價は眞珠よりも貴とし、その夫の心はかれを恃み、その産業は乏しくならじ、かれが存命なる間はその夫に善事をなして悪しき事をなさず。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

叢話

○婦人の徳は余韻に在り（其二）　中島俊子

今日お招きに成つて、何かお話しをするようとの事で御座りまするが、一躰私しは、三四年前迄では話しをするとが大層好でありましたが、近來はコワクありましてどうも十分に申せません。夫は、三四年前に申したとを今から考へて見ますると、アンナ事は言わざつたら好かつたにと、思ふとが多くて、實に汗が出るように思ひますから、若し今日話したるとによりて、他日亦た第二の汗を出さねばならぬかと考へて、大層コワク思ひます、恐れます。然し前にも申した如く、アナタ方は之から大ひにお進みなさるとであるから、假令ひ今日私しが間違つたとを申しても、アナタ方は他日明らかに其誤を見抜いて、俊子の話しは取るに足らんと云はるゝようにお成なさる、左様ならば、たとひ私しは汗を出すとがあつても、悔ゆるとはないと思ひまして、今日は少し申上るとになりました。

扨て何を申しませうかと云ふに、第一、婦人は何如云ふ所ろが善い、婦人の骨髄は何處にあるか、婦人でなくては出來ないと云ふ所ろは何かと云ふとを申したいが、之は寫眞にも寫すとが出來ず、文章にも書くとが出來ず、畫にも畫がくとが出來ぬと云ふ所ろでなければ成らぬ、左樣でなくては頼みに成らぬ、婦人があくてもよろしひ、然らば其の樣ある所ろとは何如なるとかと云ふに、之も亦た口にて明らかに申すとが出來ませぬが、たゞ其の成るべく似たる所ろを形容してお話し致しませう。

茲に此の美はしひ花がありまするを、誰も其花瓶よりも此の花に目がつく、然し此の美なる花は、たゞ此の如く自然に出來たのではありますまい、之を此處に挿む迄には、實に幾多の勞が掛つて居りませう、庭を作る人、植へる人、草を取る人、肥料を造る人、扨て之を切て花瓶に挿む人、水を入れる人、又た此の花瓶に畫をかいたる人、其の畫を書いたる後に之を燒く人、と皆ないろ〳〵の手が掛つて、遂に斯く花瓶に挿む迄に至つたのです、然し誰も水には目が着かん、花瓶にも目が着かん、先づ第一に此の花に目が着のであります。夫故へ兎角人間は、目に立つ所ろに計り居りたがりまして、若し此の中で何にあるかと云ふときは、多くは此の美はしい花になりたいと云はれませう。然し先づ此にテーブルがあり、花瓶があり、花瓶の中に水があつて、而して後ちに花が美はしく

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

見へると云ふことを知つたらば、必しも花のみ是れ尊とむべきものでありますまい。之を演劇に譬へて見ましても、矢張り同じことで、一つの忠臣藏と云ふものを演ずるときは、誰も師直よりは判官になりたい、九太夫よりは大石に成たい、原郷右衛門に成りたい、平右衛門になりたいと、いろ／＼に云ふ人がありませう、然し若し大石に計りなりたい、判官に計りありたいと云ふものがあつては迚も行はれませぬ、いろ／＼の役割を受持つものがあつて、玆に初めて忠臣藏と云ふ一つの立派なる演劇が出來るのでありませう、此の世間の演劇に於ても矢張り其の通りで、或は奴となり、或は草履取となるものがあつて、夫れで初めて一つの世の中となります、夫れ故今ま此の學校の中に忠臣藏の如きことを行ふとして、アナタ方は何の役になりたいと思ひなさる乎、たゞ目に立つ所ろの役に成りたいと思ひなさるでせうか、然し其樣な現はれたるもの計りが入り用なのではありますまい、夫は男子にも出來ませう、書にも書けませう、文章にも作れませう、然し婦人の爲すべき所ろは、決して其の樣なる所ろにはありません。（かすみ生記）

智慧ある婦はその家をたて愚なる婦はおのれの手をもて之を毀つ。

○既に晩し　　みどり

母は野の花を摘んで娘が衣に着たり、白花紅花大花小花簇然として懸る、天晴れ氣麗らかなり、娘は無心にして歌ひつゝ小河の頭りに來る、水澄み流れ踊り涓涓として聲あり、娘は胸邊の花を取つて先づ其一を投ず、花旋轉して突走して去る、狂へる車の如し、更らに一を取つて投ずれば、花亦旋轉して狂奔して去る、恰も玉を射るに似たり、又更らに一を取つて投じ、更らに又た一を取て投ず、投じつゝ端なく母が賜ひたる總ての花を投じたり、胸邊復た花なく枯焉たる衣を見る、娘則ち大ひに哭き、水よ請ふ花を返せ花を返へせと叫びたり、而して水は澄み流れは踊り只だ涓涓として聲あり。乘客百人、船之を乘せて遠海を走る、風乍ち起り、波濤忽然として山の如し、須臾にして檣催け舵斷え船腹穴を生じぬ、潮水混々として流れ入り船沒するに近し、水夫ボートを卸して既に幾多の客を送れり、只見る最終のボート將に發せんとする時、茫然として一貴婦人甲板の上に立てり、水夫大ひに叫ぶ「飛下れよ」と、彼れ身を挺せんとして臨めば、怒濤哮り、小船は秋葉の飛ぶに似たり、則ち躊躇逡巡す、水夫復た大ひに叫ぶ「飛び下れよ」、彼れ再び身を挺せんとして臨めば、

怪濤互ひに搏ち、小舟壓却さるゝに似たり、則ち亦た躊躇として逡巡す、時に大濤あり、ボートを荷ふて去る、彼と此と既に相去る二三段あり、貴婦人則ち大ひに叫んで云く、請ふ舟を返せ舟を返せと、而してボートは既に遠し、怒濤躍立、烈風奔來、其舟は次第〱に陷いつたり」蓋し、機會は失ふ可からざる也。

評に云、明治當世の女流は、正に其目前の最大好機會をして逃れしむ可らず。

○固く怒るべし　もみぢ

鎌倉權五郎景政が目を射られたるときは、矢を拔ずして、讐を覓め出したるに、新田三郎義興は、三度び敵に切らるゝ迄で兜の緒を結び、結び了つて則ち敵を伐倒したり、凡そ仇に返報するは大抵此の二樣の心得ある也。元來怒ると云ふは宜しからぬようには思はるれども、凡そ眞とに怒るなき人は即ち亦た眞に喜こぶことなし、故に怒るべきに怒るは反つて人間の務めにして、反つて是れ他日の大幸福を生ずるの基ひとなるべし、例へば不義を見て怒り、姦惡を見て怒る如きは怒ることの尤も正しきもの也。若し之をしも怒らずんば、其人や決して眞正の義人にはあらじ、即ち眞との道德の尊とむべきことを知らざるの人也、故に武王は一怒して天下を平らぐと云へり、何如に優溫たる君子婦人と云へども、願くは其の怒るべきには怒りて、以て他日其の樂しむべきに眞とに樂しみ玉へ。但だ其の怒つて敵を擊つには、或は矢を拔かずして直ちに切るべきか、若くは確かに兜の緒を緊めて而して后ちに之を伐つべきか、是れ固より其場合に由れども、女流の攻擊は多く三郎義興の如くならんことを可とす、日本の男子固より無禮なり、時として衆人稠坐の中に於て、姉妹に不敬の言行を寄することあり、諸君赫怒して之を責る固より不可なし、然れども其更らに宜しきは、先づ二刀三刀を風の如くに受け流して、御自身の裝ほひ確かに整ひたる時、則ち一閃彼が急所を刺すに若かず。

○女子看護法の心得(其四)　華族女學校教授　津田梅子

空氣流通の事　今又元に還りて申しまするが大病の時には萬事看護者の注意によります病室内にてすることは極々些細な事のやうに見へますが最も必要な事でございます偖看護の第一の方則にして之を守らねば他の事は無益なりと申す程大切なる事は空氣の流通の事でございます。

部屋の空氣の事　尤も病人に風の當らぬやうに室内の空氣を

清潔にして置ねばなりません人は生れてより死する迄日夜少しの間斷もおく空氣を呼吸いたして居ります人は之れを感ぜずして或は食事をしたり或は話しをしたり又は寐る間も吾等の呼吸は止むとき無く一分時間に平均十八回宛の呼吸を致して居ります私共の躰は實に不思議なる一つの器械にして私共の食物と空氣とは之に用ふる薪物の如くでございまして此器械の運轉を保つに最も必要なる物は酸素にして此酸素は吾等が呼吸する空氣中より得ます皆樣御存知の通り吾等が吐き出す空氣は毒にて肺より出る酸素ガス並に其他の排泄物が充て居ります此汚穢い空氣の塲所を純粹の空氣を以て補はねばなりません健康ある人にても此不潔なる空氣を再び呼吸するときは瞑眩或は頭痛がいたします是れは劇塲のやうな人込の塲所に居りますると變な氣分になりまするのでよく分ります健全の人にすら不潔な空氣の害がございますれば況して弱はりたる病人には如何ばかりの害を及ぼすか知れません日本風の家は多くすき間がありまして空氣は自由にはいりますれば此用心は殆んど必要でございませんが西洋風の家に住む者は善く注意して空氣の流通すべき道を設けねばなりません室の上の方は必ず少し開けて置ねばなりませんが冬などは殊に注意して風がひどく病人に當らぬやうにすべきことでございます廊下についたる窓或ハ人の大勢居る部屋などについて居る戶などは開けても善い空氣を透すことは出來ません其部屋の空氣は病室と同じやうに惡く爲て居るやも知れません。

躰より吐出す水氣の事　健康なる人の肺より吐出せる水氣又汗と爲りて皮膚より出まする水氣の高は一日平均「三パインツ」即ち吾七合位にして此水氣ハ汚穢物を以て充ちて居ります病氣の時は其排泄の分量も增し平生よりも尚毒なる物でございます此躰内より出づる物はどこに行くかちつと考へてごらんなさいまし其一分は吐き下しまするが多くの部分は夜具について留まります其譯は排泄物の重なる物は人の體上一面の膚理より出ることでございます。（未完）

○女の股引

松田みつ

左なきだに女の裾は開いて居りますのに、此頃の如く腰を掛るとが多くなりますと、腰より下に風が通りまして、大層に寒う御座いますから、之より色々の病ひが起ります、特に女學校の生徒方は、大抵一日腰を掛てお出でなさるのですから、其の冷え方も一層です、近年女の腰より下の病ひが段々に殖えまするは、一つは此の故であらうと狹野女醫は始終歎いて

居られます。夫故ゑ、考へますに、女の方は何方も、フランチルの類にて相應の股引をお造りなさるが善いと思ひます、特更ら女生徒方は是非そうなされませ、一つには又た貞節の用心にもなりませう。

許に云、甚はだ宜し、斯して又下帶を兼て申せし如くペテーコートの風に（上下の開ひたる袋形）仕立て、股引が此の下帯の裏かに絹を附ましたら、歩行に不便もありません。

○母親の威光

竹村の母

足れぬが故に叱られますので、決して無理とは存じませんが、良人が子供の前などにて餘まり無遠慮に叱りますから、自然子供等までが私しの申すとを聞いて呉ませず、自づと敎が屆かぬように成つて殘念と存じます、良人は大抵外に出まして、始終子供を取締りますのは、母親の役目でありますれば、成べく母親の威光がなうては成りません、夫故もし子供のある妻に過ちのあるときは、良人は能く用心して、子供の居らざる時に忠告なさるゝように願ひたく存じます。

許に云、御尤のお說、之は世の良人の心掛くべきと也。且又子供に言ふて聞かすとも、成るべく母親より言ふが宜し、良人に氣の附たるとあらば之を妻に傳へて、妻が母として敎ゆる方宜しきと也、兎角一家の中も政令が一途に出なければ成りませぬ、父母双方の敎へが違うようでは以ての外です、良人が嚴しく言附たを、母がとも〴〵に破らする如きは尙更ら論外の事です。

○婦人衞生一斑（妊娠養生の事）　（其六）

櫻井郁次郎述　佃與次郎筆記

滋養を食するに誤解すまじき事　其外、滋養物を食するにも其の通りです。大抵の御婦人方に伺て見まする所が、私は牛乳は飲めますと云ふのが一二人で、八九人は先づ飲めぬのです、稀には牛と云ふものが食べられますか杯と質問するものもある、甚しきに至ては、牛の臭を嗅げば吐くと云ふ人もあり升。滋養物は、妊娠者には此上もなきよろしき食物でありますけれども、之を用るに困難なるは、誠に殘念の至りであります。斯う云ふ實例が有ります、或る婦人ですが、妊娠しまして、所謂ツハリと云ふものになつた、懷妊後三月か四月で、非常に嘔吐がある、如何なる食事をとりましても、皆吐て仕舞う、何うしても這入らぬ、所で、或る醫者が參りまして、其の病人や、看護人に勸めまして、成る程何んでも吐て仕舞つては疲れて仕様が無くなるから、アノ牛乳は大層に藥

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

りになると云ふ事であるから、假令幾分は吐て仕舞ても、亦幾分ハ腹に殘るであらうと云ふて、彼の嫌ひの者に無理に飲ませた、幾度飲ませても納まらない、最早妊婦はツハリの爲めに死に垂んとしました、其時に私も出會しまして、篤と病人に聞て見ますと、元來牛乳などハ嫌ひだ、嫌ひだが、親類の者などの勸めで仕方がなく飲むと、直ぐ吐くと云ふ、仍て段々調べて見ますと、何うも此の病人には牛乳ハ適當して居らない、ソレから何う云ふものが食べたいかと聞て見ましたら、斯う疲れてハ居るが、茶漬に香の物で飯を一杯食べて見たい、毒でもなんでもよい、一層死ぬなら食て見たいと云ふから、ソレは妙だ食るが宜しいと云ふので、香の物で茶漬を食べた、是れは程よく納まつた、夫れから漸々に遂に牛乳を廢して、香の物で以て命を維ぐとが出きた、是ハ四五年前の事ですが、私の親しく見たる事です。夫れ故、滋養物も其人によつては、迚も適當する譯にハ往きません、況して我邦の婦人の如きハ、滋養物だからと云ふて、一概に侑めるとハ出きません、食物などハ習慣によりて最も注意すべき事と思ひます、詰り好みに應じて撰ぶべしと云ふのが、必要の言葉と思ひます。左れば、其人にして醶酸が欲しいと言へば、其醶

いもの丶中で最も滋養分に富みたる物を與へると、斯仕向れば、或は十分の結果が得られ樣と信じます。(未完)

○女學古文

幼少仕附の事

德川家康公其姬に送る書中

幼年の者利發に候とて立木の儘にそだて候へば成人の節氣隨我儘になり多くは親の申事も聞かぬものにて候親の申事さへきかぬ樣になり候へば召使の申事は猶以ての事たとへば國郡を治め候事は扨置身も立申さぬ樣に成り可申候一躰幼少の節何事も直成者に候まゝいか程窮窟にそだて候とも最初よりの仕付次第にて外より存じるほどは太儀にもなく候是を植木にたとへ候へば初に葉をかひ割れ候節人の産立とおなじ事ゆへ隨分養育いたし最早一二年も立ち枝葉多く成候節添木いたし直に成候樣に結立其うちに悪しき枝はかりとり年々右の通り手入いたし候へば成木の後ち直成能き木になりて候人も其通り四五才よりは添木の人をつけをきて悪しき枝を我儘にそだてぬ樣に致候と後は直成能き人となり申候幼少の時そだてさへいたせば能きとこゝろへ我儘にいたし置き年比になり急に異見いたし候とても我儘の悪儘枝計りしげり本木は失せ候とゆへ直り不申候是には今以て存出し候事有之候三郎出生の節は年若にて子どもめづらしく育てさへすれば能と心得氣のつまり候事はいたさせず我儘に育て成人の後急に色々申聞候へども兎角幼少の時行儀ゆるやかに捨置親を敬するとを存ぜず心やすく存じ後は親子の爭ひの樣に成り今日毎度申ても聞いれず却て親をうらやみ候樣に成行申候てそれにこり申候まゝ外の子どもは幼少より我等が前にて行儀作法よく仕付候云々(雲の月)

小説

○哲女の卷

(第八回)乙女(下)　月の舍忍

見凝めたる好子の顔を更に見凝めて、哲娥は此方を向いたり、木の間を泄る月光其面てを照らして、色いよ／＼白ろく、眼鏡は一層の光を反射し乍ら、其の下に半滴の玉露を掛くるが如く見えたり、

お好さん。

ハイ。

私しはアナタを、モウ姉妹と思つて、何も隱しませんから、固より恥しひ考へでも、既に私しの心に一杯になつて居

りまする上は、別にアナタにも隱しませんが、私しはどうしても此家に厄介になつて居ることが出來ません。

何故で御座いますか。

若し私しの家が素のやうで、一と通り生計する丈けの財產でもありまする內ならば、時には友人の好意で世話になるとも甘んじますが、今日の身分となつて、最早や一錢の財產もない時には、夫故たゞ仕方なく此樣に厄介になつて居ると思はれるが、實に殘念で御座います。

マサカ左樣も。

イエ、勿論、青山さんがさう思ひなさると申すのでは無いのですよ、青山さんは隨分私しを知つて居て下さいますが、たゞ世間の人です、何も知らない所ろの世間の人です、實に私しが名譽の事を申すやうですが、世間の人達に色々の邪推をさるゝが殘念ですから。

成程左樣で御座いますチー。

夫に青山さんに奧さんがあるか、又はお妹とでもあると申せば兎も角、世間では、私やアナタが青山さんの友人だと申したとて信用もしません、それに妻のない人の所ろに、而も少しの財產もない女が、厄介になつて居ると云ふは、實に快よくないとですから。

大きに左樣で御座います、夫れで此家をお出なさると云ふノ、實に贊成いたしますワ、而して出てから何處に參りませうチー。

何處と云つて・・・・

哲は暫らく首べを垂れて、心中に無限の騷動を鎭めながら、

別段深くも考がへませんが、橫濱の學校には多少友人もありますし、夫れに何とか申します小學校で女敎員が入り用だとか云ふ廣告を見たこともありますから、兎も角橫濱に參つたらばト思ひます。

學問には綿密なる哲孃も、社會の事に就ては固より好子の怜慧なるに及ばず、たゞ事もなげに言ひ放つを好子は反つて掛念したり、左れど一生の苦樂を之より悉く哲孃の爲に捧げ、終身の犧牲を呈して、切ては父の罪を贖はんと決心したる身には、前途の困るし氣なるが反つて忠心を現はすに力あるよう覺へて、左りとては亦た左程にも掛念せず、是れ亦た同じく安心して幼ならしき信用を据えたり、

夫れでは橫濱に參ると定めませう、然しアナタは未だ外へは出られませんよ、モ少し養生なすつて、スッパリ躰だ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

がお直んあすつてからでなくては‥‥。

イヽエ、それには及びませんよ、アナタが入つしやるまえは、私し一人ではどうも心配ですし、特に女一人で他所に留まるとも出來ませんから、何如したら宜らうと思つて毎日辛苦しまして、夫れで躰だを一層痛めたんですが、昨日から頓かに快よくなりました、今夜は尙ほ宜う御座いますワ、夫れネこんなに‥‥

と云ひ乍ら立つて常にはなく戯れかゝれば、好は斯く計り怨みを忘れて其身を信切にせらるゝが何よりも嬉しく、特に吾を左計りに賴みにし玉ふとよと思ひては、天にも上る心地して覺えず喜び泣きつ、

チヽ、ホンニ〳〵夫では大丈夫です、夫では夫れでは‥‥

ダカラ、いつそ明日出るとに仕升うよ。

ろう。

ソシテ默つて出なくては成りませんよ、手帋を後に殘して置けば善う御座います、青山さんは切度よつく私し供の思ひを悟つて下さるから、悪るくは思ひなさりませんよ、

さうしませう。

何んだか心細いようだワ。

思はず眞率に眞心を言われて、哲も突如として胸を打たれ、頓はかに元の座に返へりて、再たび例の憂鬱に沈みたるは、蓋し數多の記臆、數多の想像に思ひを亂さるゝ故なるべし。凡そ人世に愛と云へるものほど、樂しきはなく、亦た清潔の愛と云へるものほどに、高尙なるはあらず、而して高尙なる愛はいつも他を利し、身を犧牲にするとを厭はざれば、斯る愛あらんものゝ交わりこそ、特に離れ隔たりて、反つて極めて冷淡なるが如く見ゆるとあり、然れども晴天氣靜かにして千傾の波浪を流すが如くなるの海底には、反つて是れ岩を浮べ大魚を追返すの大黒潮は流るゝものぞ、義理人情は戀々たる下劣の愛情に縛らるゝともあるべし、高尙清潔の愛は常に人情義理の忠告を受納しつゝ、斷えて氣隨なる情慾の火をば燃やさゞるものなり、左れば月光は冷然として樹枝の間より射降し、一二の虫は切りに囀づつて辨ずるが如くあれども、誰か哲孃が深奧優美なる思ひを知るものあらんや。二孃暫らく聲なし、時に鏘然たる車の響門外に徹して、主人の歸宅を報ずるの叫び此の庭後に迄で聞えぬ、

お好さん參りませう。

青山さんがお歸んなすつたのですネ。

佚傳

○正傳尼、妙海尼（上）

昔し赤穗の城主淺野氏の臣にて堀部の某と云へるあり、其の夫人に夫死して後ち正傳尼と稱したるは、名だゝる女丈夫にて、一生の行狀實に感歎すべきものあり。元來一人の男子一人の女子ありしが、男は早く出家して僧となり、女家を嗣ぐべきものとなりしかば、親戚の何某より金丸と云へるを養ひ取りて之を妻はせたり、然るに其時女の年十六にして、金丸は四十ありしかば、餘まりの懸隔として人も奇しみ、女も亦た擇ばざりしに、正傳尼は大ひに怒つて、汝ちは人の妻と爲る乎、年の妻と爲る乎、彼の金丸は智勇を兼ね備へたる得がたき武士あり、彼にして初めて堀部氏を嗣ぐべきあるに、汝ち若し之を好まずば出でゝ他に行くべし、決して留まる可らずと叱りしかば、女も大ひに悟つて之に嫁し、鴛鴦交わり樂しくして既でにして一女を擧げたる、之れ即ち後ちに妙海尼として名を轟かしたる堀部氏第二の女丈夫なり。然るに此の女を擧たる後ち、母は産後の病ひを以て死しければ、正傳尼自から之を養なひ、順と名づけて教育したり。

正傳尼の名藩中に著るしければ、御殿に徵されて公子長矩公（即ち俗に判官と申す御方）のお守りとなされたるに、朝夕謹しみ事へて、須臾も離れず、若し何事か過失あるときは、號泣して之を諌め止めければ、長矩公生來の癇癖も、正傳尼を見るときは乍ち治まりけり、如此く憚かられて、太たく公の短所を補なひたるに、年七十にして御暇まを乞ひたるのち、扨ても彼の短氣なる處行によりて遂に自殺さるゝに至りたるは、正傳御傍に居ざりしが故ありと迄でに、人々は惜しみあへり。

國領取上となりたる時、正傳は順を伴ひて、大石良雄の妻子と共に京師に匿れたり、之より先き高田の馬場に於て叔父の仇を斬りたる武庸と云へるものを養ひ、順を妻はさんと定めたるが、其の未だ婚せざるに先ち、國難起りければ、武庸は金丸と共に東都に上りたり。然るに此時武庸歸り來りて、京師に參りたれば、正傳退ぞけて見ず、人をして云はしめて申す、汝ち抑も何の故に來りたるぞ、主家の仇未だ復せざるに、何の暇ありて徒らに此處に來れる、察するに妻を見んが爲めにあらずやと、武庸答へて曰ふ、決して然らず、實に大石君に見えて事を謀らんと存じてなりと、依て引きて面會したるが、其時別室に於て又た順に云へるようは、汝ちが良人

來りたり、之を見んとを欲するやと、問へるに、順ハ少しく顏ばせを赤くして恥らひつゝ、眞に御めもじ致したく侍ると云ひければ、正傳特更らに怒り、よし然らば先づ汝ぢが二つの眼を此處に抉り出して、行て見よと云ひければ、順驚ろき謝して止めたり、必竟之れ大事を爲すの前、假りの契を結ばさするは則ハち后日の大不幸となるがゆへなるべし。

年八十九、正傳沒するとき、順女に遺言して曰く、淺野氏の嗣斷絕して四十七義士未だ地下に瞑目せじ、汝ち婦女子と云へども、之が爲めに力を盡し、主家の嗣を萬代に續がしめよと、言ひ畢つて絕へぬ。

寄書

○秋夜の感

太田きん子

歸鴉天外に鳴き柝婢五時を報ず即ち食堂に入り衆と共に晩餐を喫し終つて獨り校外に出て徐ろに運動を試む時是れ深秋仰て天を眺むれは一輪の明月皎々として大虛に麗り梧桐葉稀にして月影を漏らす伏て地を望めば霜露既に降り蕉影長く亂れ庭中の風物一として凄緊ならざるはなし前に進み後に退き左に轉じ右に旋り橫に月下を遨遊するも天然の外敢て人世の吾人を咎むるなし然れども抑ふ可からざるものは六情假令ひ玲瓏たる月も蕭殺たる霜風も吾人惆悵の感を制するの力なく却て之を導て雲霧の境に吟へしむ傷しいかな天然は空々漠々人得て測る可からざるも儵忽として常理を違へず人間僅に五尺の身自ら思ふ所を遂ぐる能ハず又屹焉として確立する能ハず時々物に觸れ動かされんとすと感慨胸に迫り自ら足の進むを覺ゑず忽ち見る傍に粗なる椅子あるを即ち之に凭り月に對し遙に愁訴せんと欲すれば彼馳すると止らず恰も吾人と語るを厭ふものゝ如し吾人聲を放て叫へば彼は雲間に隱れ止めば忽ち鏡面を顯はす此に於てか思へらく世上のものは世外のものと談ずる難し寧ろ親しく處世の如何を考ふべしと獨り心に問ひ心に答へ先づ吾人は何處にあつて如何にせんとするかと精査考索して益己を知るの乏しきを愧づ然りと雖我は正に千歳の一遇とも稱す可き此明治社會に奇遇し此の幸なる否危險なる女子と共に此空氣を呼吸し共に歡苦を與にせんとす如何に吾人此責を免かれんと欲するも生命ハ僅に日本婦人の一人なることを免かれしめず然らば吾人が現在する社會は如何今や駸々乎として文華を鬪はせ莘々として女流を高尚ならしめんとし正に十九世紀の新面目茲に隆起せんとす此時に當り舊染の弊風を矯正し萬世の基業を立つべきは即是明治妙齡の婦人吾人の最も敬愛する姉妹なり故に此等の婦人は各自確乎たる精神を以て怒濤激波を恐るゝなく堂々と一針路を踏んで譲はざるの覺悟なくんばあるべからず又一己人として上帝より賦與せられたる本分を盡さゞるべからず去らば如何にして其目的を達するを得べきか抑も婦人のとたる已に普く世人の口に膾炙して耳聾するまで聞を得たり然れどもソハ當か不當か從ふべきか隨ふべからざるか吾人は此等を以て敢て己の目途となさゞれば頓着せず然れども我婦人全く何事も依賴心を去つて男子の手を待つとなく自ら實踐躬行せずんばある可からず然らざれば到底男子の手中を脱する能はざるなり然るを若しも我婦人にして徒らに慷慨し空く理論に走て萬事虛飾に流るゝあらば猶ほも世人の誹笑を蒙り却て大害を後來に貽さん或は世人は今の婦人を評して其思想なる雲の如く其言たるや風の如しと謂はんも圖る可からず故に宜しく吾人等自ら顧みざるべからず噫乎如何ぞ吾人等が此の機會に當て純潔優雅たるの婦人とならざるべきか之れ他なし第一善良にして且高尚なる理想を養成せずんばあるべからず其之を養へんとなれば即ち道義と宗教とを學び之に因て吾人の良知良能を明にし毫も外物の爲めに蔽はるゝなく能く其善心を維持するを得ば必ず自尊自謙の心發り事に當つて緩急其宜きを得一個の十九世紀新婦人たるに耻つるなきを得即此婦人集合し交際の信を固ふし自由の精神を保つことを得ば我等の社會は又動かすべからず如何なる苦厄に當り危險の時機に會するも屈撓するの憂なからんとす況んや世俗の嗜好に誘へるゝをや然るを汝此月夜に當つて憂ふるものは何ぞや若しも困難堪ゆべからざるものありと云へども吾人は一言せん夫れ時世は循環して止まず妄りに自棄して過つなかれ宜しく時と勢とを思考せよと兩手覺ゑず胸を拍てば忽ち鐘聲耳朶に轟く噫是れ七時にして自修時間なり知らず茲に二時間を經過せりと緩に歩して校堂に歸り靜に席に就く即ち當夜の感を記して以て今日の文に備ふ希くは敬愛する諸兄姉吾人の考への過たるを認めば幸に教を垂れよ。

新報

（此欄内自由に轉載を許す）

○宮廷錄事

去月廿六日午後一時頃皇后宮陛下には御步行にて華族女學校へ被爲成生徒の唱歌、箏、ピヤノ等を被聞召二時頃還御遊されたる由に承る

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○小說の頽燒

小說の勢力少しは下火となりしと思ひの外か、近來に至りて益々熾んなるが如し、譜し是迄は螢火の時代なりしが、思ふに之れより追々と松の大木に火移りすとは見へたり、吾人は固より立派なる大ひなる小說家の起らんことを望むが故に、敢て所云る小說家なるもの多く出るを嫌ふにはあらねども、近來の書生社會には少し小說志願者が多過ぎはせぬかと掛念するとなり、彼の美妙齋主人、及び我樂多文庫の諸英雄が、大抵は第一高等中學より出でたるの故にも由るか、此頃は同校の書生方に切りと小說熱心の文學者多しと云へり、たゞし吾人は何卒シッカリとしたるお方の多く出でかしと、切望して止まざるもの也。而して同時に、女流の間だに於ても亦た追々と小說家現へれんとす、吾人が女流の手に成れる未定稿の小說草稿を見ると、此頃に至りて彌よ多し、定めし、遠からず世に現へることならんが、幾重にも百の草双紙あらんより、一のアンクル、トムス、ケービンあらんことを願ふ、今の女海は浮たる慰さみ物の爲に盡力すべき時勢にはあらざる也。

○女艦

東京電報に由れば彼の英國のパルマル、ガゼツト新聞の通信員ノルマン氏は、其本國に市ケ谷の女艦の景況を左の如く通信したりと云へり、

高き板塀に依りて男子艦と區別し此間に通ずる門口は番卒之れを警衛せり而して女艦は獄室二三棟と一大工塲とより成り同じく請負仕事を爲して百十名の女囚一同之れに從事せり余が巡見中は各々小机に向ひ小さき發臺に坐して皆絹ハンカチーフの緣縫を爲し居れり而して其柿色の襤褸なる獄衣を纏ひ單に卷髮を爲したる樣は一同小奇麗に見ゑたりしが中にも數名は頗る美貌の者もありたり軈て余に附添へる獄吏は其內二名を指して彼等は重罪人なり余は彼等の彼れが如く奇麗に見ゆるを好まずと即ち之れを見たるに其內一名の婦人は傍に幼兒を遊ばせながら其業に從事し居れり又一人は余を始め來合はせたる人々を其横眼にて一寸見たる時其顏貌は他の女囚とは大に異なりて青白く且つ憂を含みたる色を顯はせり又余は其手の小くして且つ甚た白きを見たり此れは東京にて一たび有名なりし藝者花井梅なり梅は其美其三味線其踏舞其自負を以て有名なりし然れども其情話一條に就きて最も有名なりし二年前其召使男か豫て此女を身請けせんと所望し居たる其情人と此女との間に立入りて紛議を起さしめ而して後更に自分が口を利きて其間に仲直りを爲さしめんと申出したりしより梅は大に之れを怒りて一夜其召使男を戶外に呼出し出刃庖丁にて之れを刺殺したり是れ梅が此女艦に入りたる原因にして最早梅は其三味線も彈なく歌も默して情話一條も身邊を去り又獄鐘の外は曾て三味線を聞くことを得ず唯だ時に觸れて前日の事を思出すことを得るの一事を除くの外浮世の快樂は最早永久に之れを知ること能ざるべし而して前日の事を思出せば出す程一時偶々梅と同居したる傍人の眼にも其顏色は愈々蒼ざめて見る影もなく瘦せ衰ふるのみなり。

○看護婦の卒業　東京慈惠醫院附屬看護婦教育所にては此の程高木醫院長が臨監の上へ生徒長川八重清水のぶ島さん三子の卒業試驗を執行せられしに何れも卒業せられたる由。

○發殺　江州神崎愛知兩郡にては此度產婆講習所なるものを設置したり○近江婦人慈善會犬上支會の開會式に臨まれし中井縣知事夫人より淡海女學校へ金二十五圓を寄附せられたり○東京府下の產婆は本日上野櫻ケ岡大日本美術協會に於て集會を催ふす由。

外報

（此欄內自由に轉載を許す）

○英米の婦人比較　此頃英國婦人禁酒會の席上に於てワルミストン、チヤント夫人は演說して云く米國の婦人は英國の婦人よりも能く組織す然れども英國の婦人は米國の婦人よりも能く實行すと。

○米國婦人禁酒會年會　十月十九日より米國ニウヨークなるメトロポリタン、オペラ、ハウスに於て開かれたる同會の第十五回年次大會に於ては委員米國各州より出席して惣員凡そ三百七十二人あり惣べての議事圓滑に終り且つ禁酒黨に連合するの議は彼のアイヲワ、ペンシルバニア二州委員の反對ありしにも係へらず再たび可決せられ會計委員の報告は出入差引て四千五百四十九セントの殘金ある趣にて尙ほ會頭は投票三百九十一の中ち三百六十の大多數を以てウイルラルド孃を再撰したり。

○不道德文書禁止會　萬國不道德文書禁止會とも稱すべきもの來年スウイツルランドに於て開かるべき筈なり。

○少年讀書會　米國にてウイルラルド孃リバモア夫人校長バスコム氏博士ライマンアボツト氏教授スターンス氏及び少年之友の記者ウイリヤム、ライデング氏の發起により少年讀書會なるものを設け童男童女が讀みて宜しき書籍を都合よく編纂し彼のチヤトウクワ會(日本大坂の文學會は此會の支派也)と同校の趣向にして清潔なる文學の弘まるゝように盡力せらるゝよし而して其の敎科書申込はS. R Winchell, 106 Wabash Avenue, Chicago なり。

○支那一孃卒業　支那本國の宣敎師の令孃フー、キン、エン子は宣敎志願にて當時米國留學中なるが此頃デラワルなるフハヨウ、エスレアン大學を卒業し更らにフヒラデルフヒアの醫學校に入校したり。

○佛國の女學　佛國も亦た女子高等敎育の勢力大ひに增加すと見ゑたり此頃セインの前議員にして當時 L'Enseignement Secondaire des jeunes filles と云ふ雜誌を發刊せらるゝカシリエ、セイと云へる學士は佛國有名の學者及び政事家に書を寄せて女子高等敎育の可否を問合せたるに多くは之を贊成する旨の答文ありし由今ま其の大畧を左に拔抄せんに、

現大統領の父カルノツト氏は德政大學の委員なるが云く余は戶籍帳に女子の性名の上に常に無職業と云へる三字の記入あるを見て每度歎息するなり其の

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

職業に安んじて獨立獨行するは人間の至樂なれば婦女子も亦た其丈けの教育を受け天賦の長所を發達して特有の能を發ゆるを可とす。

上院議員レフン、セー氏は云く女子は萬事に男子に優るとあり故に男子は切めて之に優る丈けの教育を受けて以て女性との平均を取るを也云々。

上院議員兼佛蘭西大學の教授エミール、デシヤネル氏云く女子の教育あるは男子の幸福なり只だ夫れ女子を壓制して己に屈服せしめんと思ふより則はち女子の高等教育を不可とするものある也。

議員レチ、ゴブレット氏云く佛民の心を感化し且つ其上下の階級を溶混するの力あるは即ち女子高等教育也。

上院議員バルドウ氏云く佛國民道德の地位は女子の教育の何如に關係すべし。

在ベルリン佛國公使ジールス、ハーバート氏云く智識ある女子の間に立つては男子は其身の無學なるを恥づべし故に女子の高等教育は亦た男子の教育を進む。

斯てセイ氏は女子高等教育並にセブルの師範校に女教員を用ゆるとの建議案を呈したり。

○アメリカン、クイン　米國ボストンに於ても女王雜誌と稱する新雜誌發行せらるべき由にて紙數は毎號七十二頁づゝの美なるものゝ趣き盖し英のクインにも劣らぬものとなるべし申込はRand, Avery & Co., Boston.

○高等法院と女子　米國の高等法院に於て是迄女性の代言人が入つて代言したるは今度まで都合三度なりと云ふ第一はロックウード夫人第二はデノホース、ゴルドン夫人第三は即ち此回のビッテンペンデル夫人なり。

小供談

○正直なる小娘　（其一）

今より百年程以前、アメリカと申しまする國に、大きな戰爭がありまして、其國の人民は英吉利と云ふ國と、敵對になりました、其戰爭の間には、色々と目覺ましひ働らきが多くありました、中に、茲にグリスチルドと云ふ一人の府知事は、或る時其の親類の許に行て居りましたる折柄、頓かに敵兵之を探り知りて、之を捕へんとて出て、來ました、グリスチルドは最早致し方ないとは思ふたが、兼ねて其近邊の川に船を殘し置き萬一危急の場合は之に乘つて、逃れんとの用意を致し置きたるとゆへ、一と先づ此迄で逃れんと覺悟して急ぎ飛び出でました、固より表てを通るとが出來ませんから、裏門を出で、籬根を破り突然後の庭に出でました處が十二三の小さき娘が布を晒らして居る所で、彼はビックリしました、然しよく見れば自分の從兄でしたから、先づ〳〵落附きました、グリスチルドさん何をなさるので左樣にお急ぎなさる乎と、問ひましたれば

チー、ヘッチーさんかへ、今ま兵隊が來て私しを捜しますから逃げる所ろですが、私は早く河の處ろに行て船に乘らあければモー迚も助かる道がありません、今其方へ逃る所ろですが、アナダは何卒表に出て濱邊の方に行つてチ、兵隊が來たら甘く言つて下さい、詰度アナタに私しの事を聞でせうからシタラ私しは街道の方へ逃げて車に乘たと言つて下さい、スルト兵隊は彼方へ追掛けて行ますから其中に私は船に乘られます、チどうぞ願ひます。

よと言ひつゝ早く行き過ぎんとせり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

社告

女學雜誌代金滯候御方に

毎々御催促申上候ども尚ほ御拂込無之仁あり而も其御住所すら分明ならざる向も候まゝ如此き御方に限り以後雜誌上に於て御催促申上候に付不悪御承知被下度候但し本社は專ら情義を重んじ候心由に有之決して輕々しく右樣の取計らひ不仕存候得共何分三四ヶ月以上も滯り居り候ヒ毎々の御催促に一錢をも御寄せられざる諸君に對しては實以て不得止の處置と御許容あり度預め申上置候也

女學雜誌社會計係

大敎正本居豐穎君題 大野定子女史作
佐々木弘綱大人校閲 原田鵬洲翁書

女用消息文

文案百篇 定價金五拾錢
美書插入 郵税金貳拾錢
全二冊

此書ハ新年祝祭日四時時候ノ賀詞訪問等ヨリ日常雜事ノ往復贈答ニ用井ル普通ノ女用書狀ノ文案ヲ示シタルモノナリ又近年書狀ノ文體ニ從來男女其趣ヲ異ニセルハ其謂ハレナシトノ世論モアレバ其適スベキヲ改良シテ而シテ事柄ト用語トハ婦人ニ本分ナル婉淑ノ體ヲ失ハシメズ且字體モ平易ナル行草平假名交リニ大ク書シタレバ文案ヲ求メ方ヲ又習字ノ手本トモナリテ兩得至便ノ最良書ナリ

發兌書肆 東京日本橋區通一町目十三番地 小林新兵衛

私立女子文藝學舍學科附設廣告

○本舍從來ノ科目ハ和洋服裁縫編物插花點茶英學數學和歌ノ八科目ナリシヲ今般琴漢學ノ二科目ヲ增設シ同生徒ノ新入ヲ許ス○郵券二錢御送附アレバ規則書ヲ呈スヘシ○當舍ハ規則トシテ束脩ヲ要セズ

麹町區中六番町六番地
自述會ニ於テ

私立女子文藝學舍

交詢案内

（催促する勿れ 郵券十錢送れ 委細に申來れ）

●雇ひたき方（甲）

十一 學婢 年齢十五六位ノキリスト教信徒にして新水の業に從事し傍ら英學編物等の學業に志ありて給料に望なき者を雇度所あり

十二 下婢 年齢廿歳より五十歳迄の基督信者を雇入度者あり

●雇はれたき方（乙）

六 奉公 地方出の[illegible]學業中にて學資に困むに付ては可成西洋人宅にて[illegible]給にて何地にてもよろし

七 裁縫 年齢廿三にして家内の手助けとならんがため内職に裁縫に雇はれ度き者あり[illegible]か町家ならば大家のかたき内にて[illegible]ならば通いにても宜しとの事其他ハンケチーフのふち縫の如きにて[illegible]

十三 教師 [illegible]の學業中にて何處かの學校或は他の御内にて教師に雇はれたきものあり可成くは[illegible]時間[illegible]を望む

十四 洋行 [illegible]十八歳位のものにて英學も可なり出來るものにて[illegible]婦人の隨米に航せらるゝ御方の小間使ひとなりて洋行を願ひたし

一九 召使 其採の教授を專にし其他女子學校等監督舍監等居候の者に雇はれたし

二〇 裁縫 年齢十四五才にて謹直な者か婦人方の御方之内へ小間使に雇はれたし最も[illegible]けくだされば給料は不申受

二四 奉公 年齢廿二才にして一と通り裁縫もいたし氣質の生れつきにて業上に好かれ中以上の官[illegible]方へ申付きに奉公いたし度し給金は望無以上に願ひたし

●喜びのめぐみ

十一 助教 乙第二十三號は築地の某小學校へ雇はれたり

本一日一ッ橋外高等中學校内大學講義室に於て例會相開き候會員諸君は申すまでもなく御友人方御誘引御出席相成度候也

本日之講師演題左の如し

櫻井郁次郎君 演題（産婦幷に孕婦の養生）
長井長義君 演題（洗濯）

東京々橋區日吉町八番地
私立大日本婦人衛生會

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

小兒科外來診察廣告

小兒科外來患者（十二年未滿ノ者）ハ自今毎月水金ノ三曜日午前十一時迄ニ來院ノ者ヲ診察治療ス尤モ其症ニヨリテハ施藥ヲナス

明治廿一年十一月

醫科大學 **第一醫院**

文法口授

鈴木弘恭大人著○一冊定價十八錢

右は明治女學校、成立學舍女子部、跡見女學校、頌榮女學校、長榮女塾等の教科書なりし處**第一高等中學校**に於ても此度び亦た此書を以て**教科書と認定**せられたり、他の各女學校及び男子の學校に於ても同様に採用せられんことを請ふ

女學雜誌社

●通信女學講義錄

巖本安實

通信女學講義錄は毎月一冊發兌にて大抵六七十枚づゝあり此親又は妻君方が家に在りて女學の一と通りを學ぶの工夫なればば毎月其一冊を讀みて行き二三年を經れば和學理學地理歷史及び子育方、女子生理、家内理學、經濟學などの一斑を承知すべし。之は一冊二十錢にて半年前金一圓一年前金二圓也。當十一月にて既に第十四卷を發兌したるが、第十三號よりは讀者大に增加したるより隨つて第一卷より第十二卷迄凡そ一年分は都合五十部ほど餘まり居るに付之を賣拂ふべし即はち其定價を減じて**十二冊**（從一卷至十二）**一圓**郵稅及び**廿四錢**にて賣拂ふべし尤も五十部より外は即はち第十四卷まで揃ろい居るに付き定價通りならでは賣拂ひ不申候、よつて右御入用の方は至急御申込ありたく候事但し府下は配達料十二錢可申受候

京橋區日吉町八番地

女學雜誌社

遞信省認可

發兌					
九月。	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
十月。	六日	十三日	二十日	廿七日	
十一月。	三日	十日	十七日	廿四日	
十二月。	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日

定價

一冊。五錢　郵稅。一錢（但府内無郵稅）
十冊。四十八錢郵稅。十錢（同前）
半年分　一圓十七錢　府外は　一圓四十三錢
一年分　二圓卅四錢　府外は　二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を掲する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行　一回（廿七字詰）　前金拾錢
同　三回以上　一割引
同　六回以上　二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.

Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町穀々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町國々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町貢明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文叅堂○横濱住吉町角田至貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入淺集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町○石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十一年十一月廿九日印刷
明治二十一年十二月一日出版

發行所　東京京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

編輯兼發行者　東京京橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

印刷者　東京芝區源助町十一番地寄留　森田豐

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

小兒科外來診察廣告

小兒科外來患者（十二年未滿ノ者）ハ自今毎月水金ノ三曜日午前十一時迄ニ來院ノ者ヲ診察治療ス尤モ其症ニヨリアハ施藥ヲナス

明治廿一年十一月

醫科大學 第一醫院

文法口授

鈴木弘恭大人著○一冊定價十八錢

右は明治女學校、成立學舍女子部、跡見女學校、頌榮女學校、長榮女塾等の教科書なりし處**第一高等中學校**に於ても此度び亦た此書を以て**教科書と認定**せられたり、他の各女學校及び男子の學校に於ても同樣に採用せられんとを請ふ

女學雜誌社

●通信女學講義録

殘本安賢

通信女學講義録は毎月一冊發兌にて大抵六七十枚づゝあり此親又は妻君方が家に在りて女學の一と通りを學ぶの工夫なればば毎月其一冊を讀もて行き二三年を經れば和學理學地理歴史及び子育方、女子生理、家内理學、經濟學などの一斑を承知すべし。之は一冊二十錢にて半年前金一圓一年前金二圓也。當十一月にて既に第十四卷を發兌したるが、第十三號よりは讀者大に増加したるより随つて第一卷より第十二卷迄凡そ一年分は都合五十部ほど餘まり居るに付之を賣拂ふべし即はち其定價を減じて**十二冊**（從一卷至十二卷）**一圓**（及び郵税）**廿四錢**にて賣拂ふべし尤も五十部より外は即ち第十四卷まで揃ろい居るに付き定價通りならでは賣拂ひ不申候、よつて右御入用の方は至急御申込ありたく候事但し府下は配達料十二錢可申受候

京橋區日吉町八番地

女學雜誌社

發兌					
九月。	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
十月。	六日	十三日	二十日	廿七日	
十一月。	三日	十日	十七日	廿四日	
十二月。	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日

定價			
一册。五錢	郵税。一錢	（但府内無郵税）	
十册。四十八錢	郵税。十錢	（同前）	
半年分	一圓十七錢	府外は	一圓四十三錢
一年分	二圓卅四錢	府外は	二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する所には雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行（廿七字詰）前金拾錢
一回
同三回以上 一割引
同六回以上 二割引
十行以上一割引二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる物の廣告は無代價にて引受く女學に關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町殷々堂○同[illegible]川町萬保堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町[illegible]堂○同日本橋區[illegible]○同京橋區木挽町[illegible]丁目萬[illegible]○同本鄉町四丁目文[illegible]○同本町六丁目日[illegible]へ入クリスチアンボ[illegible]雜誌部○宮城縣仙[illegible]進堂○[illegible]縣大手[illegible]々堂○相州小田原綠[illegible]町石寺堂○上州高崎田町燒平堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十一年十一月廿九日印刷
明治二十一年十二月一日出版

發行所 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

編輯兼發行者 東京京橋區日吉町八番地寄留 巖本善治

印刷者 東京芝區源助町十一番地寄留 森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 sen. By post yen 1.43 six months, yen 2.86 per annum, in advance.

Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tōkyō, Japan.

遞信省認可